



一
厨
蝕
太
平
樂
記

七



~ 13
3553
7



門 13
號 3553
卷 7



厭陸人平樂氏志の七

目録

一

斤相日元秘卷と述の事

并述の今本秘云々事

一

小村重成斤相の述と述の事

并斤相の述と述の事

早稲田 大學 図書館
33.11.10 受
藏 書



目錄

1. 太平樂記卷之七

1. 太平樂記卷之七

厭能太平樂記卷之七

斤相且元秘卷之本

吳建人今本

夫月... 決之... 人... 公... 一...

義と存る者た... 龍心... 龍心... 龍心...
 龍心... 龍心... 龍心... 龍心... 龍心...
 龍心... 龍心... 龍心... 龍心... 龍心...
 龍心... 龍心... 龍心... 龍心... 龍心...
 龍心... 龍心... 龍心... 龍心... 龍心...
 龍心... 龍心... 龍心... 龍心... 龍心...
 龍心... 龍心... 龍心... 龍心... 龍心...
 龍心... 龍心... 龍心... 龍心... 龍心...
 龍心... 龍心... 龍心... 龍心... 龍心...
 龍心... 龍心... 龍心... 龍心... 龍心...
 龍心... 龍心... 龍心... 龍心... 龍心...

昨松之由也... 又... 計...
 又... 計...
 又... 計...
 又... 計...
 又... 計...
 又... 計...
 又... 計...
 又... 計...
 又... 計...
 又... 計...

又... 計...
 又... 計...
 又... 計...
 又... 計...
 又... 計...
 又... 計...
 又... 計...
 又... 計...
 又... 計...
 又... 計...

常しく此と云てふりて方と起るす時
泣き入り物と懐く人との懐く常と曰れ
何れも母もこの志を捨てて懐くは
泣きの日秋と家に入れば母も
此公の母も入れば母も懐く
母も上と懐く人との懐くは
母も懐く人との懐くは母も
母も懐く人との懐くは母も
母も懐く人との懐くは母も
母も懐く人との懐くは母も

と一母も懐く人との懐くは母も
母も懐く人との懐くは母も
母も懐く人との懐くは母も
母も懐く人との懐くは母も
母も懐く人との懐くは母も
母も懐く人との懐くは母も
母も懐く人との懐くは母も
母も懐く人との懐くは母も
母も懐く人との懐くは母も
母も懐く人との懐くは母も
母も懐く人との懐くは母も
母も懐く人との懐くは母も

室を置りて又其を召し置りて
 関東より兵を起して
 邦を治むと云ふも
 行刑せし城戸を
 び下し内大臣使方
 下しと云ふを
 衆を掃討し
 と何人なるも
 つひめらば

満国者より其の
 方難が事し
 の所へ
 ろなる
 取らば
 流人
 世に
 人へ
 法に

大日本外紀 卷之十七

五

八世とてつておん御とゆきも一取手はてたれ
 があへはりてしるるをさる所内とてあはれ
 こゝろのあたりのめり今戦たりけり
 押寄て討集とてとるごまにまのまへに
 おこししは押寄まへて一戦のめり
 とてしるるに人殺りあはてし
 花よりあはてあはれとていふに
 上道は名成して今もはるる
 為人、偉なりしは所初内とてあはれ

對句して今主後府にゆくは
 又た又の田依後守が
 えとらとてさるる
 かうな後守とていふ
 子もてあはれ
 下が娘とていふ
 心あはれ
 のち候とていふ
 舟とていふ

くらぬの嶮嶮に人々を殺すは文代りも母
 事をもに人々を殺すは文代りも母
 八軍兵をも殺せん中殿りて上と斗まれ
 十人殺の事と流す遊めしと流す遊めし
 中人が事と流す遊めしと流す遊めし
 かしらやとえらに己れ一人の事殺せし
 ころしと事と流す遊めしと流す遊めし
 事へ長物流す遊めしと流す遊めし
 時を待たず文代りも母は村用持たぬ

出陣す人々を殺すは文代りも母
 事をもに人々を殺すは文代りも母
 八軍兵をも殺せん中殿りて上と斗まれ
 十人殺の事と流す遊めしと流す遊めし
 中人が事と流す遊めしと流す遊めし
 かしらやとえらに己れ一人の事殺せし
 ころしと事と流す遊めしと流す遊めし
 事へ長物流す遊めしと流す遊めし
 時を待たず文代りも母は村用持たぬ

浮ぶるしつひきと文を平より母の
 りあつめを是は宿言といふし
 こんど此の條へて内々家屋やうりやうに
 ちやのちを圓の数を文あはらに
 かくて物事のありのまゝいし
 と物事ものごとはいふに
 こと—のれを陣くるの今ある流を流ながし
 市は及是をさへて流及ながのみ
 ぬくまのちをさへて流ながし
 入乗相いりりやうと上流に流は日の同文
 ぐらふ入海うみに美からよめた
 母を首かみをさへして流ながし
 用の物ものをさへして力ちからを
 かく知しゆるる市は
 流の今今年—
 川かわの流ながしと流ながし
 若流わかながしと流ながし
 一とて入物いれもの

入乗相いりりやうと上流に流は日の同文
 ぐらふ入海うみに美からよめた
 母を首かみをさへして流ながし
 用の物ものをさへして力ちからを
 かく知しゆるる市は
 流の今今年—
 川かわの流ながしと流ながし
 若流わかながしと流ながし
 一とて入物いれもの

仕立水調と云の今もあつてある

此の行角は使禁不法なる傳角

劫は怪物等と云もいふは彼處なる

相ひ交好まじく不慮に信なる事

別と云ふ事不慮なる事なる事

美思ふ我名照る事と云は海軍の事

い復たあつた私事も云はる事

者能志我事と云ふ事と云はる事

今解つてはさめ旅と云はる事

い

ハリカ

日之記

運の甲は守り

今本深なる事

形のつくちてはる事も云はる事

足手くぬる事と云はる事

花は活物と云ふ事と云はる事

傳してはる事と云はる事

か回る事と云はる事

とつふ山を日ヶ根ふるくた聖なるを
善軍破とはあるた物中の強勁とめ角一
とをへ金とてあめを造りていふた物と法
之為へはあもむき金とては用とせ
より聖方へ力と方たとまきく
とらひぬを力と根とていふた物と法
りうとていふた物と法とていふた物と法
ひべし物城の中へつるが美の景と戦ふ
とあつたはるふとていふた物と法

自奉都とてあつたはるふとていふた物と法
美田はまるしつとていふた物と法
国はと平法とていふた物と法
へて事とていふた物と法
とていふた物と法
忠告のものとていふた物と法
法本園とていふた物と法
邦のあつたはるふとていふた物と法
てとていふた物と法

渡解の流と誓ふ所は

おもしろくふた船が着るふ所なり

とるふれどもを成し

あつ長つたふれどもを成し

晴し用ひふれどもを成し

暮とふれどもを成し

めとふれどもを成し

小村重成行柳が流と誓ふ所なり

英行柳別と誓ふ所なり

引て行柳之流と誓ふ所なり

鳥を成して行柳と誓ふ所なり

と誓ふ所なり

流と誓ふ所なり

鳥を成して行柳と誓ふ所なり

引て行柳之流と誓ふ所なり

鳥を成して行柳と誓ふ所なり

日中至^り甲^子たる^に入^り行^ふ所^を人^を整^へ
 ぶ^る當^りと^すて^は名^を稱^すは^して^は事^を行^ふ
 初^め日^の行^はる^には^して^は美^を自^を誇^り
 事^を入^りあ^らま^りあ^らま^りの^に日^の行^はる^に
 て^は信^を封^を封^を封^を封^を封^を封^を封^を
 後^にて^は信^を封^を封^を封^を封^を封^を封^を
 事^を入^りあ^らま^りあ^らま^りの^に日^の行^はる^に
 ら^して^は信^を封^を封^を封^を封^を封^を封^を
 の^に日^の行^はる^には^して^は美^を自^を誇^り
 信^を封^を封^を封^を封^を封^を封^を封^を

信^を封^を封^を封^を封^を封^を封^を封^を
 村^に上^り田^を取^りる^には^して^は美^を自^を誇^り
 渡^りて^は信^を封^を封^を封^を封^を封^を封^を封^を
 上^り果^を入^りあ^らま^りあ^らま^りの^に日^の行^はる^に
 て^は信^を封^を封^を封^を封^を封^を封^を封^を
 我^の心^を安^んず^るに^はし^ては^して^は美^を自^を誇^り
 信^を封^を封^を封^を封^を封^を封^を封^を封^を
 る^には^して^は美^を自^を誇^り
 て^は信^を封^を封^を封^を封^を封^を封^を封^を

太平御記 卷之七

十四

し城丈公へ馬松原橋をかりもと破りて
 け入入陣の弟へゆけしり道に治法を
 命じてもち事ある答もせ初又事定用ひ治
 法直に治法をせし者名違ひ城をけし見
 りく波を垂しし長き我が宮内少輔を親
 もと依て治法をせし人けし城を破りて
 もち治法をせし者名違ひ城を破りて
 日比野治法をせし者名違ひ城を破りて
 周知する所丹治法をせし者名違ひ城を破りて

武田源頼朝はし者名違ひ城を破りて
 もち治法をせし者名違ひ城を破りて
 小島及村之平六郎てはるの治法をせし者
 者へ又治法をせし者名違ひ城を破りて
 治法をせし者名違ひ城を破りて
 て治法をせし者名違ひ城を破りて
 けし治法をせし者名違ひ城を破りて
 治法をせし者名違ひ城を破りて
 治法をせし者名違ひ城を破りて
 治法をせし者名違ひ城を破りて

我々も石のたれをうりて一たれをたれしるま
 成る向ふを誰かか物に作らば毎朝も
 志波の東に河原がわたり他には河原の傍を
 押さへ橋の手くつて一たれ舟のまのちのさ
 けらりやうにうりて一たれ舟のつらうに千一
 ねん波をうりて一たれ舟のつらうに千一
 ねん波をうりて一たれ舟のつらうに千一
 と志波の河原にたれ舟のつらうに千一
 ねん波をうりて一たれ舟のつらうに千一

是の舟のつらうに我々も石のたれを
 成る向ふを誰かか物に作らば毎朝も
 志波の東に河原がわたり他には河原の傍を
 押さへ橋の手くつて一たれ舟のまのちのさ
 けらりやうにうりて一たれ舟のつらうに千一
 ねん波をうりて一たれ舟のつらうに千一
 と志波の河原にたれ舟のつらうに千一
 ねん波をうりて一たれ舟のつらうに千一

べくいよ言の武見始を在年一も武之改めたる
 介役ありて盛なりしも人相なりとて人相六むりも
 して一没ありて名を在りてとて内ふも其の一没
 あり人中のいほりありしも信をまゝ思居
 織の渡橋も同じもの甲とありて是念の大方
 と草一して人相系射圍を干し得るなりし人相射圍
 汝波理のら面致心泣生とありしし志直なり
 の所初と濟きし一已初格をなむる為り河田と
 幸ふ松の身の極して射をとりて人相なりしと
 ほの所初と濟きし一已初格をなむる為り河田と
 の池がととそとて有るなりしとてぬりて
 と踏ちやむる服を以てして人相なりしと
 膳自をもせんし治るなりし人相なりしと
 してありて人相なりしと人相なりしと
 自ら心月と衣も一与なりし人相なりしと
 改所なりし人相なりしと改所なりしと
 一のとりて人相なりしと人相なりしと
 休むるなりし人相なりしと人相なりしと

市をたがひてけしきあつて好むべしとて
人望まはるゝのふとてあつてけしきあつて
てんちを清くし

一 厭鈍を平重光の七郎



